

「瓦版」



2025. April. 1
在仙台カンボジア王国名誉領事館

No.22

カンボジア王国労働職業訓練省からの研修員受入について

宮城県経済商工観光部国際政策課長 高橋 征史

宮城県では、国際協力事業として、母国の発展と本県と海外をつなぐキーパーソンである「親宮城」人材の育成を目指し、「宮城県海外研修員受入事業」を実施してきました。

これまでは、友好県省である中国・吉林省からの研修生を中心に受け入れを行っていましたが、令和6年度は、新たな取組として、カンボジア王国労働職業訓練省から研修員を迎え入れることとしました。約1ヶ月にわたる本事業を振り返り、その成果と今後の展望を記載します。

カンボジアからの研修員受け入れ

今回、カンボジアから宮城県にお越しいただいた研修員は、カンボジア労働職業訓練省のオム・ニモルさんです。プノンペン出身のニモルさんは、メコン大学で日本語を習得し、2015年6月から3年間、徳島県の学生服製造会社にて、通訳として勤務した経験を持ち、その後、カンボジアの送出機関での勤務を経て、2019年12月にカンボジア労働職業訓練省に入庁されました。ニモルさんは、日本語能力に長け、日本とカンボジアにおける人材の送り出し及び受け入れについて精通されているなど、本県とカンボジアの架け橋となる存在として、貴重な研修員であると感じておりました。

研修員受入にあたっては、在仙台名誉領事館の田井進名誉領事（フン・マネット首相特別補佐官）がカンボジア王国労働職業訓練省のヘン・スオ大臣に協力を依頼していただく等、多大なる御尽力をいただきました。



田井進名誉領事（右）を表敬訪問する
ニモルさん（左）

多岐にわたる研修プログラム

ニモルさんの研修期間は、令和6年11月1日から11月30日までの約1ヶ月間でした。県庁内での研修に加え、県内各地の企業や外国人材の受入に関する団体、大学等を訪問し、関係者と意見交換を実施したほか、カンボジアからの留学生の皆様にも御協力いただき、留学後の進路や本県での就職意向等について、意見交換を実施する等、幅広い研修プログラムを受けていただきました。

また、松島、鳴子等、県内の観光地にも足を運んでいただき、宮城県の魅力を感じていただきました。

特に、鳴子の「こけし」が気に入ったようで、「お土産としてカンボジアに持って帰りたい」と話しておられました。

宮城県職員向けの研修で講師として登壇

11月13日には、二モルさんが講師として「カンボジア国内の人材送り出しの状況」と題した県職員向けの研修会を開催しました。

二モルさんは、御自身のこれまでの経験を踏まえ、カンボジアから海外への人材の送り出しに関する状況や送り出しに至るまでの各種手続き等について、御自身がまとめた資料に基づき、流暢な日本語で説明されました。

研修会には、国際政策課をはじめ、外国人材の受け入れに関わる部署の県職員が出席し、カンボジアの文化や労働事情等、多岐にわたる質問に対し、二モルさんは一つひとつ丁寧に回答していました。



県職員向けの研修で講師を務める二モルさん

本事業を振り返って

約1ヶ月にわたる研修を通じて、二モルさんには、宮城県における外国人材の受入に関する現状や課題等について理解を深めていただいたほか、本県の魅力についても体感していただいたのではないかと考えております。

12月下旬には、知事がカンボジアへ渡航し、「カンボジア人材の送り出し及び受け入れへの推進に関する協力覚書」を締結する等、本県とカンボジアの絆は、ますます深まっている状況です。

県内企業の人手不足解消に向け、二モルさんには、宮城県とカンボジアをつなぐ架け橋として、御活躍いただけますと幸いです。

今回の研修員の受け入れにあたって、カンボジア本国との調整に御尽力いただきました田井進名誉領事をはじめ、在仙台カンボジア名誉領事館の皆様には、改めて御礼を申し上げます。



修了証書を受け取る二モルさん（右）と筆者（左）

※本記事は、宮城県経済商工観光部国際政策課がカンボジアとの交流推進に向けた取組の一環として寄稿しているものです。

平 泉



平泉は、奥州藤原氏三代によって建設された仏国土（仏の教えによる平和な理想社会）です。

中尊寺は嘉祥 3 年（850）、比叡山延暦寺の高僧慈覚大師円仁によって開かれました。慈覚大師は天台宗第三代座主で、世界三大旅行記のひとつ『入唐求法巡礼行記』の著者としても知られています。松島 瑞巖寺、平泉 中尊寺、平泉 毛越寺、山寺 立石寺の開祖とされており、これら四寺をめぐる旅を「みちのく古寺巡礼 四寺廻廊」と称し、人々の信仰を集めております。

長治 2 年（1105）より奥州藤原氏初代清衡公によって大規模な堂塔の造営が行われました。二代基衡公は父の志を継いで薬師如来を本尊とする毛越寺の造立をすすめ、三代秀衡公は阿弥陀如来を本尊とする無量光院を建立しました。三世仏（過去釈迦、現世薬師、未来世阿弥陀）を本尊とする三寺院の建立は、すべての生あるものを過去世から現世さらに未来世に至るまで仏国土に導きたいという清衡公の切実な願いの具現でもあったのです。

中尊寺の中で現存する唯一の創建遺構である金色堂は、三間四面の小堂ながら平安時代の漆工芸、金属工芸、仏教彫刻の粋を凝縮したものであり、また奥州藤原氏の葬堂として日本史上に独特の位置を占めてきました。また経蔵には藤原氏三代によって発願され書写された金銀字交書一切経、金字一切経、金字法華経が納められました。金字一切経は都でも皇族や上級貴族しか行うことのできなかった写経事業で、金銀字一切経にいたっては慈覚大師の『入唐求法巡礼行記』に中国五台山に存在したと記されているのみで、国内では唯一のものです。

毛越寺の寺伝によると嘉祥 3 年、慈覚大師が東北巡遊のおり、この地にさしかかると一面霧に覆われ、一步も前に進めなくなりました。ふと足元を見ると、地面に点々と白鹿の毛が落ちております。大師は不思議に思いその毛をたどると、前方に白鹿がうずくまっておりました。大師が近づくと、白鹿は姿をかき消し、やがてどこからともなく、一人の白髪の老人が現われ、この地に堂宇を建立して霊場にせよと告げました。大師は、この老人こそ薬師如来の化身と感じ、一字の堂を建立し、嘉祥寺と号しました。これが毛越寺の起こりとされます。

往時には堂塔 40 僧坊 500 を数え、中尊寺をしのぐほどの規模と華麗さであったといわれています。奥州藤原氏滅亡後、度重なる災禍に遭いすべての建物が焼失しましたが、現在大泉が池を中心とする浄土庭園と平安時代の伽藍遺構がほぼ完全な状態で保存されており、国の特別史跡・特別名勝の二重の指定を受けています。平成元年には、平安様式の新本堂が建立されました。

ゆったりとした池のほとりで、奥州藤原氏が描いた仏国土に思いを馳せてみてください。

